

平成 25 年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助研究報告書
沿岸漁業者による学術的知識を活用した自主的な資源管理に関する考察
インディアナ大学大学院人類学部 濱田信吾

概要

現在、厚岸のニシン刺し網漁業では、承認数や操業期間、投網反数に加えて、網目合いを1分9分以上とする規制が新たに設けられている。一方、小樽などニシン漁獲高の回復が著しい地域では、研究機関から提供される資料をもとにして目合い2寸以上という規制が主流となり、漁期も短縮されつつある。本研究では、沿岸漁業者が「現場主義」を意思決定の基とする一方で、「机上の空論」と捉えがちな研究に基づいた知識と資料を、自らの漁業資源利用の「実論」に活用するか否かの過程を考察した。

本研究では、Ethnographic Decision Models (EDMs) という民族誌学的アプローチに基づいた質的研究法を用いた。厚岸の刺し網漁業者が、どのような条件がそろった場合に、学術的知識に基づいたニシン資源管理規定のさらなる強化に合意しうるかという過程に関する仮説生成を目的とした。聞き取り調査を通じて、漁業1者がもつ2寸目以上または以下の刺し網の使用の意思決定の理由をできる限り多くリストアップした。第二に、聞き出した理由の頻度や発言中にあったキーワードを取り上げた(例、ニシンの大きさ、既に所有する網目2寸目以上の刺し網の数、資源管理意識、科学的知識への不信感など)。第三に、第二の結果に基づいて、2寸目以上の刺し網を使用するか否かに関する決定過程をツリー図を表した。「はい-いいえ」の矢印に従い、意思決定の要素の重要性をランク化し、そのプロセスをチャート化させたものである。そして、どういう条件下で漁業者がさらなる網目規制に同意しうるのかと、研究組織からの「網目規制を強化すればニシンは増える」という意見を、どれだけ現場の漁業者が同意、考慮、または様々な理由から拒否するのかという二点を考察した。

今回は仮定ツリー図の作成までの基盤研究までに留まってしまったが、次年度にツリー図に表された意思決定のプロセスの整合性を実験したい。研究結果は、今後厚岸におけるさらなる水産資源保全の促進に役立てられればと期待する。